日本学校教育相談学会

THE JAPANESE ASSOCIATION OF SCHOOL COUNSELING AND GUIDANCE

栃木県支部会報　2015.09.30　NO.23

○　理事長あいさつ　　日本学校教育相談学会栃木県支部理事長　　柴　一弥

○　平成２７年度日本学校教育相談学会栃木県支部総会

○　カウンセリング特別講座「ヘルプ！！～即興劇で考えるイジメ問題～」

講師　　丸山　隆　氏（栃木県カウンセリング協会理事長）ほか

○　第２７回日本学校教育相談学会総会・研究大会（大阪大会）

○　栃木県支部事務局からお知らせ

○　理事長あいさつ

日本学校教育相談学会栃木県支部理事長　　柴　一弥

この夏、大学時代の友人と東北に出かけてきました。石巻、南三陸町にそれぞれ１泊ずつ、石巻、女川、気仙沼も訪ねた旅でした。友人の発案で、立派なホテルや旅館を利用する大名旅行はしないという取り決めでした。自分たちに経費をかけない、現地で少しでも金を使おうという考えがあったからです。春先からゆっくりと検討をする時間も取りました。決してみなさんたち暇をもて余しているわけでもなく、それなりにお忙しい方ばかりなのですが『ああでもない、こうでもない』と本当に久しぶりに旅の前準備を楽しみました。

二泊目の南三陸町はレンタサイクルで巡りました。まずびっくりしたのは、ダンプカーの押し寄せる「嵐、嵐」でした。海岸線沿いに少し高いところを走る国道には、ひっきりなしに土や砂を満載したダンプカーが爆走していました。復興とはまさにこのことかと全身で感じる瞬間でした。そんな国道際にあの鉄骨むき出しになってしまった「旧防災庁舎」がぽつんと建っていたのが印象的でした。甚大な津波被害を受けた志津川地区は、今生まれ変わろうとしています。近くの高台に登ると、SF 映画の世界にでも迷い込んだかと見まごうばかりの近未来都市が建設中でした。山を崩してかさ上げしたそのエリアに町全体が移ることになるのです。すでに医療機関、役場、多目的アリーナ、ゆくゆくは鉄道を通すのだと思いますが線路道を走る BRT というバスの停留所が機能していました。

小さな港が眼下に見える民宿には復興に携わる工事関係者が飯場代わりに寝泊まりしていました。ちょっと場違いだったかなと感じる私達でしたが、彼らの生き生きと輝き放っていた目を見るとなぜか身の引き締まる思いをしたのも確かです。

次の日、民宿のオーナーが短く語ってくれました。「俺の民宿も津波にのまれ、でも懲りずにまたここに建てたんだよ、あっちには行きたくないよ」と。そういえば石巻で乗った被災地巡りの観光タクシーの運転手さんも「高台に町機能を移設するのもいいけど、もっと避難方法を完璧に住民が理解できるようにしておけばこんなおおがかりなことしないでもいいのかな」とつぶやいていたのを思い起こしました。生まれ育ったその地を簡単には手放せない思いが詰まったそれぞれのひとことでした。

私は教員だった昨年まで被災地から移ってきた女子高生、そして今年は男子高生の相談相手をしています。この夏の小旅行で感じた地元の方の思いを反芻すると、関わってきたこの生徒たちの心の奥底に実はどんな思いを巡らせていたのか、今になってはっとさせられるのです。これまでの関わりの底の浅さに恥じ入る気持ちが湧き起こるのです。とくに昨年まで授業や相談で何度も接してきたあの女子生徒には「がんばれ、がんばれ」の励ましししかできませんでした。しっかり寄り添う、しっかり肩入れすることの難しさ、できそうでできない未熟さにまた気づかされる夏の一コマでした。

○　平成２７年度日本学校教育相談学会栃木県支部会総会

平成２７年５月３０日（土）に栃木県教育会館５階小ホールにて、平成27年度日本学校教育相談学会栃木県支部総会が催されました。今総会は、柴新支部長の下、まとめ上げてきた総括と期待の１年でもあり、多くの会員の皆様方からも大きな賛同を得ました。（議事はすべて承認されました）

また、特別講演「ヘルプ！！～即興劇で考えるイジメ問題」では、栃木県カウンセリング協会理事長丸山隆氏をはじめ、鹿沼のせせらぎ会の方々の迫真的な演技を見ることができました。

総会議事

（1）平成２６年度事業報告

（2）平成２６年度決算報告

（3）会計監査報告

（4）平成２７年度事業計画案

（5）平成２７年度予算案

栃木県支部役員（平成２７年度）

【支部理事長】
柴　一弥

【理　　事】
池田清惠　伊澤　裕
小川正人　川俣幸雄
佐藤幹雄　原田浩司
藤浪直紀　簗瀬のり子
松本直美　馬場友治

【監　　事】齋藤誠一郎　平峰孝二

【事務局】中山芳美　髙松千恵子

（文責　馬場友治）

○　カウンセリング特別講座「ヘルプ！！～即興劇で考えるイジメ問題～」

講師：栃木県カウンセリング協会理事長　丸山隆氏　と　せせらぎ会の皆さん

〈丸山氏とせせらぎ会の皆さん〉

５月３０日、栃木県支部総会に引き続き、カウンセリング特別講座が教育会館小ホールで開催されました。学校教育相談学会栃木県支部前理事長の丸山隆氏が率いるグループの公演（講演）です。

丸山氏や鹿沼市家庭教育オピニオンリーダー「せせらぎ会」の皆さんのいじめ防止への熱い思いのこもった「サイコドラマ」を軸としたすばらしい講座でした。

〈会場からも即興で参加〉

内容は、実際にあった中学生のいじめの事例にもとづくもので、被害者、加害者、傍観者、それぞれの家族、教師などが登場人物となり、事実や心理を多面的に理解し、考えることができるサイコドラマ仕立てとなっています。さらに、会場の参加者との

やりとりから即興劇も交えられ、臨場感、会場との一体感も生まれ、心に響き、イジメ理解や対応の学びも深まりました。一方で、親として、教師として、また、スクールカウンセラーなど大人として子ども達の心にどう寄り添い、イジメを防ぎ、解決していくか、多くの課題も突きつけられるものでした。

限られた紙面で、サイコドラマの詳細、丸山氏の独特のパフォーマンスやご示唆をお伝えできないのは残念ですが、人気の公演は今後も県内の様々なところで行われると思います。情報をキャッチされたら、ぜひ参加してみてください。そして、それぞれの立場で、直接子ども達のいじめ防止学習に活かす試みも考えてみてはいかがでしょうか。

（参加者の感想）

学校では、いじめの有無の調査がありますが、いじめ防止の取り組みとして、文化祭などにサイコドラマを児童生徒が演じることで、人の気持ちを理解することに役立つのではと思いました。

日常生活での何気ない会話で、家庭でも子供自身を傷つけていることがあり、サイコドラマで客観的に見ることができました。演じるということで、相手の気持ちをより理解しやすくなるように思えました。

（文責　松本直美）

○　第２７回日本学校教育相談学会総会・研究大会（大阪大会）

大会テーマ「学校教育相談の充実・深化を図る―これからの地検に学び活かす―」

日本中が猛暑にあえぐ８月１、２日、二日間にわたり第２７回日本学校相談学会の総会・研究大会が大阪で開催されました。栃木県からは会員６人が参加し、お二人の方の研究事例発表がありました。また３１日にはワークショップも行われ、それぞれのテーマへの学びを深めることができました。１日の総会では、より多くの会員の方が相談学会に入会し共に学んでいけることをめざし、学校カウンセラー認定規則の改正が承認されました。そして、新会長の栗原慎二先生から、これからの相談学会の成長を図っていくこと、学校教育相談の普及と充実をめざし会員の資質向上を図ることなど、今後の相談学会の在り方について力強いお言葉であいさつがありました。支部代表者会議においては、各支部の事情や取り組みが紹介されました。改めて各支部の会員数を見ますと、栃木県支部は全国で２番目に大きな支部となっています。事務局としてもさらに支部の皆様に役立てるような企画をしていかなければと感じました。

来年は第２８回総会・研究大会が８月６、７日、ワークショップが５日に岡山県岡山市にて、開催されることが会員の総意で決定されました。

（文責　中山芳美）

夏季ワークショップ報告

①　「リフレーミングを使いこなそう！システムズアプローチの実際」（Ｄコース）

講師　神戸松蔭女子学院大学　　坂本真佐哉　先生

柴　一弥

資料らしいものはなかった。参加者との相互対話で講座は進められた。聴いて、記して、参加するといったかたちのこの研修はけっこう私にはハードだった。怠け者でアナログな私は手元になにかペーパーでもあると落ち着くのだが今回はそうはいかなかった。この報告の唯一の資源は慌ててとったノートのメモだけである。

配付された講座資料集には１ページ分だけ次のような記載があった。

①リフレーミングって何？
②具体的にはどのような事例がある？
③支援の現場でのリフレーミングの実際
④リフレーミングによって何が変わる？システム理論で読み解く
⑤リフレーミングが押しつけにならないためのコツ
⑥リフレーミングをやってみよう

実際の講義の流れは上記のようにはならなかったが、キーフレーズ・センテンスを挙げ、私なりに理解した形で報告する。賢明なる会員の方々には持ち合わせた知識と推察力で足らない隙間部分を埋め合わせて自己完結していただきたい。

・文化社会的、育ち方の違いでそのことは病気になったり、能力になったりする。（神のお告げ、巫女）
・とらえ方によって問題が問題でなくなる。
・問題は社会的コミュニティーの中で生まれる（ケンカはケンカすること自体に意味がある…「ケンカするほど仲がよい」というリフレーミングが成り立つ→「ケンカしない例外探し」はソリューションアプローチにつながる）
・物事にはいくつかの側面があるということに注意を向けよう
…夫婦の子どもに対する意見の違い（「いろいろな視点から子どもを支援している」というリフレーミング→対立関係はけっして仲が悪いのではない）
＜あるひきこもりの事例＞…父親は学校で疲れているのだから「息子は休憩中」というリフレーミングができる。母親は現実的に考えるので焦り感が強い。父親とは時事問題、ニュースネタで会話ができる。母親とは会話にならず、「べつに～」とかわされてしまう。
＊そこでカウンセラーの介入。
①家族で気分転換。リフレッシュのすすめ。一日１回は実行する。例えば外食に連れ出す。食事の好みは夫婦で統一する。
②夫婦の会話を増やす
③家族を考える意味づけができる。父親のリフレーミングを母親も共有化する
④学校以外の話題を些細なことでもいいから子どもに語らせ、リラックスを図ることが父親のリフレーミングに厚みを加える
⑤母親が少し元気になる。
⑥母親が元気になれば子どもも変わってくる
＊留意点
・「肩入れ」が大切。…上記の事例で言えば、カウンセラーは両親のどちらからもしっかり話を聞き,労をねぎらい、中立でいて中立ではなく、どちらにも激しく肩入れしたくなるまで、「なるほどそういうお考えなのですね」と言えるまで聞き抜く。そして父、母の願い、希望、望みは何かを考える。
「子どもに学校に行ってもらいたい」の背後に「子どもに元気になってもらいたい」という隠れた希望、願い、望みがあることに気づくことができるか。
・子どもがいないところでカウンセリングをするときには、目の前にいない子どもを中心にしない→犯人捜しをして夫婦対立状況をあぶり出してそこで終わりにしてはいけない→来所している夫婦が連合して子どもの元気を取り戻すために何ができるかを考える。
＊参考（カウンセリング辞典より）
リフレーミングとは「事実というものに我々が無意識に与えている『意味づけ』を変える技法。たとえば、『夫が子どもにきびしすぎる』と訴える母に『ご主人は子どもさんに嫌われても、しつけをなさろうとするところがおありなんですね』とリフレームする。介入課題―多くはパラドキシカルな課題―を遂行させる時に特に有用である。また、構成主義との関係で、現代家族療法の中心的な研究トピックになっているテクニックである。

②　「行動科学からみた、気になるこどもの理解とこども支援のアプローチ
～愛着障害・発達障害への支援～」（E コース）
講師　和歌山大学教育学部教授　　米澤好史　先生

髙松千恵子

今年の夏も、連日耳にするのは「猛暑」「熱中症に注意」の言葉でしたが、そんな暑さをものともしないかの様な活気に溢れる大阪で、７月３１日にワークショップが行われました。

日頃の相談活動を行うなかで、発達の問題や愛着の問題を抱える子どもたちへの支援の難しさを感じていましたので、和歌山大学教育学部教授・米澤好史先生の「行動科学からみた、気になるこどもの理解とこども支援のアプローチ～愛着障害・発達障害への支援～」を受講することにしました。

まず、混同される発達障害と愛着障害の違いについて、事例をもとにしての説明がなされ、**講師の米沢先生**や発見のポイントを学びました。そして、子どもの感情の問題は低年齢ほど行動の問題として現れやすい傾向にあるので、行動の問題からその可能性を察知することであるとして、理解しやすい例をいくつも挙げて話されました。それらの中には、「物を振り回しながら歩く、何かをさわりながら動く⇒移行対象の問題（母親の代わり）」「床への接触・寝転ぶ・這い回る⇒接触感欲求と包まれての安心感の欠如」など、児童・生徒に見られる日常的な行動が数多くありました。そして、最も興味深かったのは、愛着修復は「いつでも・だれにでも・一人から」可能であると力説された

ことでした。愛着修復は実の親だけでなく、子どもたちに関わる支援者にもできると話される米澤先生から、今後の活動への新たなエネルギーをいただいたような研修になりました。

第２７回研究大会に参加して　　小川正人

７月３１日のワークショップは、出張が入ってしまい参加する事ができませんでした。出張から帰って来て、５時半に家を出て大阪に着いたのは１１時半になってしまいました。夜の大阪というのは、ちょっと雰囲気が違っていました。

翌日ホテルアウィーナ大阪で第２７回総会が行われました。平成２６年度事業報告及び決算、平成２７年度の事業案及び予算が原案通り承認された。また会則改正が提案され、支部理事は会長の承認を得ないで、支部理事会で選出されることになりました。

総会終了後は、予定では子ども教育広場代表の野口克海先生の「愛されている子は人を愛することが出来る」でした。しかし、体調不良のため講演する事ができず、日本学校教育相談学会の嶋崎会長が『学校教育相談学会の「礎」「輝」「志」～学会の「こしかた・これから」～』というテーマで講演しました。嶋崎会長は今総会で退任されましたが、その講演内容は「学校教育相談」が現場に導入されてからの状況やエピソードでした。

午後は分科会２の「一般級における子どもの愛着形成への支援で」で、公立小学校の田崎さより教諭の発表を聞きました。「一般級」というのは、一般学級のことを指していました。愛着障害の児童を担任として、どう対応していったかという実践発表でした。

その後は、自主シンポジウム３「大規模災害から子ども達を守り支えるために」に参加しました。３人のパネラーは、阪神・淡路大震災、東日本大震災の経験者で、その経験をもとに意見を述べました。

８月２日は、第８回小泉賞受賞者講演で、北海道砂川小北剛治教諭『意図して集団を育てる“集団づくり”の視点から見た「ゼロ段階」「隠れたカリキュラム」存在』の発表を聞きました。その後はラウンドテーブル「いじめ問題の予防と初期対応を語り合う」に参加しました。途中からでしたが、小中高別のグループ別にテーマについて討議しました。

記念講演『学校教育相談学会の「礎」「輝」「志」～学会の「こしかた・これから」～』

講師　日本学校教育相談学会　嶋崎政男　先生

柴　一弥

この記念講演は当初教育広場代表野口克海先生が行う予定だったが、体調を崩されたため嶋崎会長が行うことになった。１時間程度の短い時間であったがざっくばらんに思うところをお話しされ、飽きさせずとても引きつけられる内容だった。

以下の講演骨子は、大会要項冊子の会長挨拶と重なる部分が多いので参考にさせていただいた。

＜礎＞　教育相談活動は「うんうんとうなずくだけの似非教師」、「閑古鳥今日も騒がし相談室」と揶揄されていた時代があった。臨床活動一辺倒の教育相談活動だった。だから管理的で元気がよい教員が荒れた学校環境を立て直してきたという風潮もあった。

しかし、黒子のように見えないところで子どもに寄り添い、下支えになってきた多くの教員もいたことは紛れもない事実。本学会草創期の先輩たちは、学校教育相談を「すべての教師がすべての児童生徒を対象として、あらゆる場面において行われる教育活動である」と位置づけ、相談活動のあり方を開発、予防、問題解決という三つの機能をコンセプトにしてきた。

＜輝＞　以来、「教育相談は生徒指導ができない人がやっている」、「管理、指導、叱責はしない偏った児童生徒優先」というよう大きな間違い、勘違いをする教職員はいなくなった。高い山、すなわち専門家はひとりいればよい。「遠くの専門家」よりいつも生徒児童の身近にいる「近くの先生」が下支えになり、保護者、そして地域資源と連携し、包括的に学校環境を心地よい安定した安全な居場所として整えることが当たり前になってきている。

＜志＞　学校現場では学校職員の世代交代が急速に進む中、これまで積み上げてきた貴重な「遺産」の継承が課題となっている。本学会もその渦中にあり、今の輝きをさらに力強く発展させるには、若い教職員と一緒に地道に実践とそれに基づいた研究を行い、問題行動の対処にとどまらず、道徳教育、特別活動、キャリア教育など幅広い分野にこれまでの知見を生かすことだ。

「チーム学校」「フリースクールで卒業可」といった新しい発想が文科省からも提案された。これから細部は検討されるようだが、教員減につながる恐れや、学校教育法との整合性など課題は多い。

どのような時代になろうが私達は、生徒たちの心理的事実、客観的事実にある気持ちを最大限に受け止め、「だめなものはダメ」と言い、指導と支援を両立させながら教育相談を深化させ、生徒たちの目の輝きを育てていこう。この輝きは会員を輝かせ、相談学会そのものを輝かせてくれるにちがいない。

分科会報告

第６分科会　　栃木県立宇都宮白楊高等学校教諭・社会福祉士　　川浦典子

今回の大阪大会で「スクールソーシャルワークと学校教育相談」というタイトルで発表させていただきました。用意した資料が全部なくなり、全発表中で一番多くの方が聞きに来てくださったと聞き、教育相談関係者のスクールソーシャルワークに対する関心の高さを実感しました。昨年夏、子供の貧困対策に対する大綱が閣議決定されて以来、新聞でも毎週のようにスクールソーシャルワーカーという言葉を目にします。今後、法改正によりスクールカウンセラーまたはスクールソーシャルワーカーを基幹職員として位置づけるという動きも出ています。

スクールソーシャルワークは学校社会福祉援助技術と訳され、福祉現場で使われている援助技術を学校現場に応用したものです。カウンセリングが個人の内的な心に働きかけるのに対し、ソーシャルワークは外的な環境調整をすることに主眼を置いており、カウンセリングだけでは解決できない貧困、虐待をはじめ、不登校やいじめなどの問題の根本に働きかけ、環境を変えていこうとするのが特長です。

しかし、ソーシャルワークは一つのスキルであって、スキルを使いこなせるかどうかは結局それを使う人間次第です。スクールソーシャルワーカーが導入されても、私たちが今まで実践してきたカウンセリングの技術をより一層磨いていかなければ、結局はスクールソーシャルワークの技術を効果的に活用できないということは、言うまでもありません。

今年度、私は大阪府立大学に内地留学をさせていただいております。来年度は栃木県に戻り、今回の内地留学で学んだ知識を活かした教育相談活動をしていきたいと考えています。また今後はスクールソーシャルワークの視点を活かした相談事例などを発表し、支部の仲間と知識と技術を共有して、栃木県の学校教育相談にスクールソーシャルワークの技術を取り入れ、子供たちのために切磋琢磨していきたいと思います。

第８分科会　　栃木県立大田原東高等学校教諭　　原沢大生未

第８分科会は、立命館大学大学院教授の増田梨花先生を座長にお迎えして、研究大会最終日の８月２日（日）９時３０分から行われました。

筆者（原沢）は、「自尊感情を高める取り組み」として第一発表をしました。内容は、勤務校（大田原東高等学校）で行った「生徒の自尊感情を高める取り組み」とその効果についての分析で、「安心できる学習環境」と「充実した共通体験」が、生徒の自尊感情を高める重要な要素であるということでした。その中で、学業成績や部活動の活躍と自尊感情の高さは、直接関係していないことが指摘できました。人生への問題意識の持ち方で自尊感情は左右されるので、成功体験を多く経験させることと同じく、個々の生徒の問題意識に寄り添うことが重要であることを筆者は再認識しました。座長の増田先生からは、多角的分析方法として、複数のアンケートのバッティングについてご教授いただきました。

第二発表は、兵庫県こども発達支援センターの黒木幸敏先生の「中学校でのアサーション・トレーニングの効果に関する研究」でした。「自尊感情を高めるために、アサーション・トレーニングは有効か」との問題意識の下、８ヶ月の間に16回のトレーニングを実施した集団１と、２ヶ月の間に７回のトレーニングを実施した集団２についての比較が報告されました。黒木先生によれば、アサーション・トレーニングは自尊感情を高めること以上に、個々の気づきを深める働きがあり、長期の継続した活動で集団内に良好な人間関係が形成された集団１に、自尊感情の高まりが見られたとのことでした。「良好な人間関係の中での共通体験が自尊感情を高める」ということが示唆された報告でした。

今回、筆者は発表者として大会に参加しました。今までと違った学びの機会を与えていただいたことに、関係の先生方、学会員の皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

○　栃木県支部事務局からのお知らせ

＊平成２７年度事業計画

開催期日	事　　業　　名	会　場	備　考
10月17日(土) 13:30～16:00	【第28回支部研究発表】 ＊コメンテーター　毎澤　典子氏 発表者①　井野　維子 発表者②　齊藤　恵美子 発表者③　望月　都	栃木県教育会館2F ミーティングルーム	日本学校教育相談学会スーパーバイザー
11月14日(土) 13:30～16:00	【第29回支部研究発表】 ＊コメンテーター　簗瀬　のり子先生 発表者①　後藤　輝子 発表者②　佐藤　幹雄 発表者③　和田　朋子	栃木県教育会館2F 小会議室	日本学校教育相談学会認定委員
12月　5日(土) 13:30～16:00	【カウンセリング特別講座・合同研修会】 講演「子どもが快復する家族支援のコツ」 講師　亀口　憲治 先生	栃木県教育会館 ５F小ホール	東京大学名誉教授 国際医療福祉大学院教授
1月9日(土) ～10日(日)	【日本学校教育相談学会・中央研修会】 シンポジウム　「不登校・ひきこもりを支援する立場からの学校教育現場への提言」(仮題)　指定討論者　小林正幸先生	オリンピック記念 青少年センター	東京学芸大学教授
1月30日（土） 10:00～16:00	【発達障がいセミナー　・　栃木県支部主催】 「愛着と発達障がい」 講師　山岡　祥子氏	とちぎ青少年センター 第一研修室	臨床心理士 栃木県連合教育会 相談部員
2月　6日(土) 13:30～16:00	【精神医学特別講座・合同研修会】 講演「思春期の精神障害」 講師　原　隆氏	栃木県教育会館 5F小ホール	アイ・こころのクリニック院長

ニューズレター（支部広報紙）No.２３、No.２４発行

＊平成２７年度北関東ブロック研修会のお知らせ

１０月３１日（土）１４時～１６時３０分　　山梨県韮崎市内において
「子どもと共に居るということ」（仮題）　　昭和大学准教授　副島賢和 先生
子どもの「生きる力」を引き出す教師の在り方について、院内学級の児童生徒との関わりを通してのお話です。詳細は、学会ホームページ（http://jascg.info/）をご参照ください。

日本学校教育相談学会栃木県支部

〒320-0066　宇都宮市駒生　1－1－6
教育会館内　栃木県連合教育会相談部
日本学校教育相談学会栃木県支部事務局（中山芳美・髙松千恵子）
TEL　028-621-7274　　FAX　028-627-5682
E-Mail　：　soudan@tochigi-rk.jp
ホームページ　：　http://t-soudan.sakura.ne.jp/index.html
（会員の部屋パスワード　tb-jascg3123）

発行責任者　柴　一弥
報担当者　馬場友治・平峰孝二・松本直美